

REPORT

スイス

披露演奏会で小澤征爾が指揮台に
育まれた若き才能がパリに響く

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

小澤征爾国際アカデミー2015

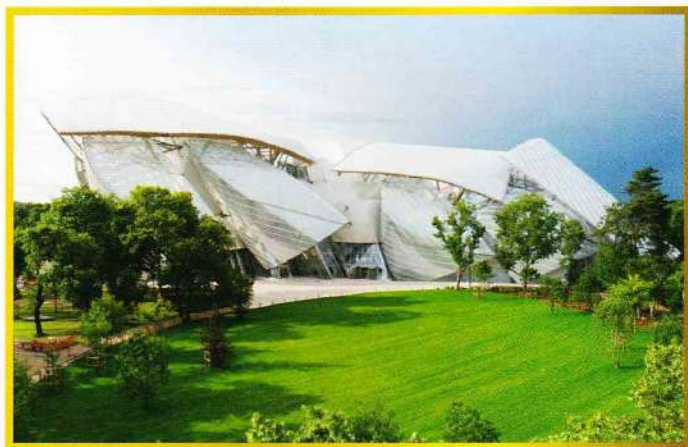
2005年にスイスのジュネーヴ近郊、ロールで創設されたスイス小澤征爾国際アカデミーは、室内楽、とくに弦楽四重奏は音楽の本質的な要素であり、それに取り組むことは音楽家にとって欠かせないという理念のもと、オーディションで選ばれた若き才能が弦楽四重奏団を結成し、

国際的に活躍する演奏家の指導を受ける。パメラ・フランク(vn)、今井信子(va)、原田禎夫(vc)が教授として招聘され、アカデミーは6月19日から7月3日まで開催、パリではアカデミー生の演奏会で小澤征爾がタクトをとった。

小澤の存在が
インスピレーションの源

アカデミー関係者全員が小澤の体調を心配し

小澤国際室内楽アカデミー奥志賀の生徒だったピアノリストに請われて、2005年に小澤征爾がスイスで始めたこのアカデミーは、今年も6月19日からロールで開催された。26人の受講者リストには第1回から連続参加の3名も含まれ、日本からも二人が名を連ねていた。レマン湖に面するのどかな街での1週間はあつという間に過ぎ去ったという。パメラ・フランクや今井信子、原田禎夫ら講師のレッスンを毎日受け、彼らの助言や示唆に沿って室内楽グループの中で徹底的に追求しているうちに1日が過ぎていくのである。参加者は時間感覚を3度の食事とお昼休みの卓球遊びでのみ実感できたようだ。



パリのブローニュの森の中のアクリマタシオン庭園に隣接するフォンダシオン ルイ・ヴィトンの建物は、アメリカ人建築家、フランク・ゲーリーの設計によるもの。6月30日から7月3日まで、スイス小澤征爾国際アカデミーがレジデンス活動を行い、2回のコンサートと、一般公開される弦楽四重奏マスタークラスおよびオーケストラ・リハーサルを行った©Iwan Baan, 2014



7月1日と3日にフォンダシオン ルイ・ヴィトンで行われたコンサートでは、モーツァルト、ベートーヴェン、ラヴェル他6人の作曲家による弦楽四重奏曲より単楽章をアカデミー生たちのクワルテットが演奏し、後半はアカデミー生たちによるアンサンブルがベートーヴェン「弦楽四重奏曲第16番」より第3楽章と、グリーグ《ホルベルク組曲》から第1,4,5楽章を演奏した(写真は1日の小澤征爾指揮による公演から)

ていたが、参加者の印象によると健康状態は良好だという。体調によって比較的困難な日もあったかもしれないが、小澤が持ち続けている若い精神は、孫ほどの年の参加者すら驚かせていた。音楽に従事していない時間に要するエネルギーをも、音楽が彼に与えているという印象を受けたという。そして小澤は、若者の指導と彼の人生の夢を継続して実現していくために全力投球し続けていると参加者は受け止めている。その存在は彼らにとって筆舌に尽くし難いインスピレーションの源となり、音楽を奏でている時にはいつも心の中に小澤征爾を思い描いているとさえ語る。

小澤征爾が指導した最初のプロローベ(練習)は素晴らしい体験だったと、初参加のエリン・コレフ(IV)は回想する。「ベートーヴェン『弦楽四重奏曲第16番』第3楽章のプロローベで、エネルギーに満ちた、とつびで愛すべき人格の小澤先生に初めて接した時、僕の心は嬉しくてたまらなかつた。先生から発せられているオーラは常に自信と学ぶ意欲を与えてくれた。第3楽章は彼の指揮にかかると、ベートーヴェンの熟成した思慮深い作品が要する大きな静寂と深さを得た。

グリーグ《ホルベルク組曲》では、その多面性とそれぞれの曲に隠されている楽しみ方を教えてくれた。

それでも、プロローベと旅でエネルギーを消耗した小澤のコンディションを考えると、医者やアカデミー関係者、参加者らすべてがロールでのコンサートとフォンダシオン ルイ・ヴィトン(ルイ・ヴィトン財団)での2回目のコンサートは指揮せずに休養に充てて欲しいと進言した。小澤はすべての演奏会で参加者と共演できないことをとても残念に思いながらも、ホテルでの長時間に渡る話し合いの末、アカデミー関係者の説得に応じた。

演奏会でさらに磨かれる アカデミー生たち

6月26日ロール城中庭でのコンサートを皮切りに、続く演奏会はどこも特別な雰囲気を感じ出すロケーションで、信じ難いほどポジティブな空気の中で行われた。28日にはスイス・ロマンド交響楽団の本拠地であるジュネーヴのヴィクトリアホールで演奏会が催された。その内装の美しさと音響、そしてホールが有する独特の雰囲気は初受講者は息をのみ、舞台上上がった瞬間には快さと気品を感じ、その空間にいられるということに誇りを感じながら演奏できたという。ジュネーヴでは精神病院でも演奏会が催された。それらの人々の前で自分たちの音楽を演奏することによって、愛され、受け入れられたと肌で感じられた体験は、若い音楽家たちの心に深い感動を刻み、これからの音楽人生にとって有意義な体験となった。

7月1,3日はパリのフォンダシオン ルイ・ヴィトンでコンサートが開催されたが、パリという街で演奏できること、また、長い歴史と優雅なスタイルを有するルイ・ヴィトンのコレクションからインスピレーションを受けて演奏できることは、意義深い経験であったという。

特に小澤が指揮した7月1日の共演は言葉で表せないほどの体験だったが、敢えて表現するならば「小澤先生が彼の感覚世界に私たちを招き入れてくれる」感じだったという。

このアカデミーと小澤征爾の精神は参加者にとって比類のないもので、11回連続参加の一人キム・スヨンは、これまでアカデミーのお陰でたくさんの経験を積んでこられたという。「将来に対して全く新しい視点が生まれた」「生涯の友と呼べるような友達に多く出会えた」と語るアカデミー参加者たちは、翌年の参加を目標にしなから、それぞれの道に戻っていった。